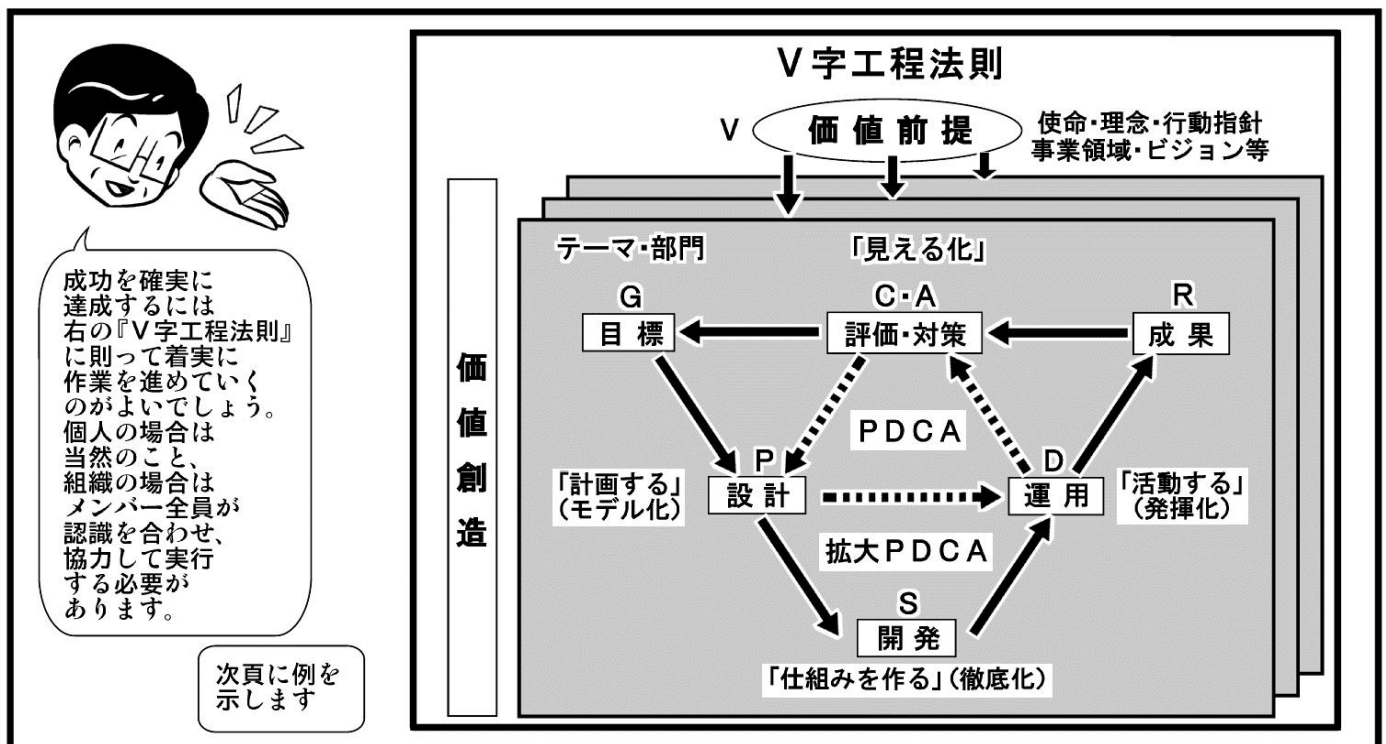
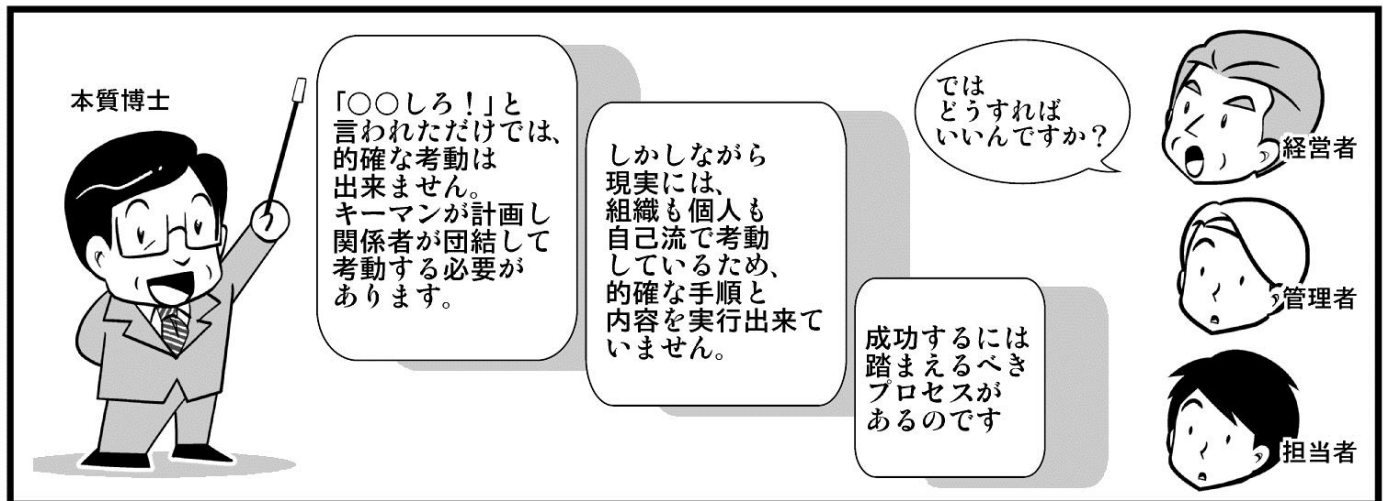
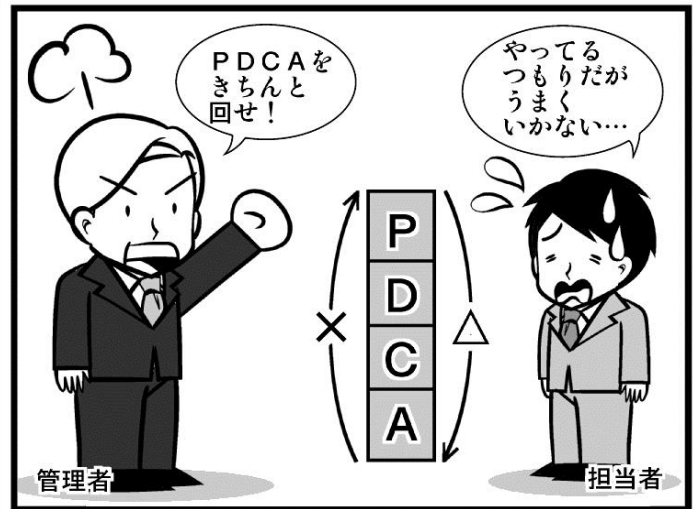
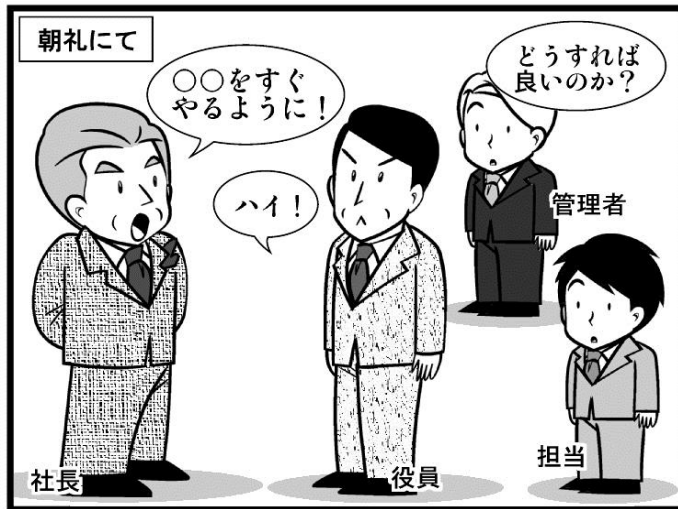


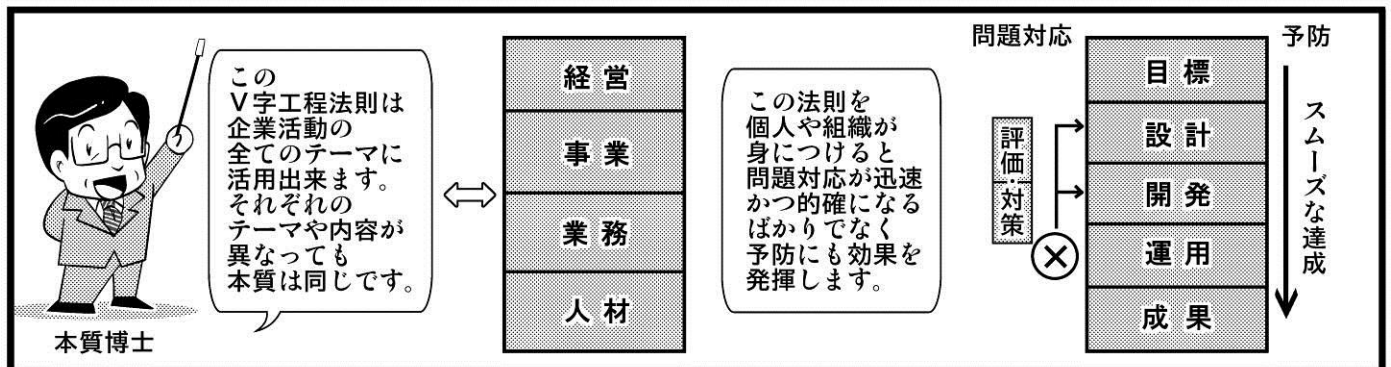
V字工程法則



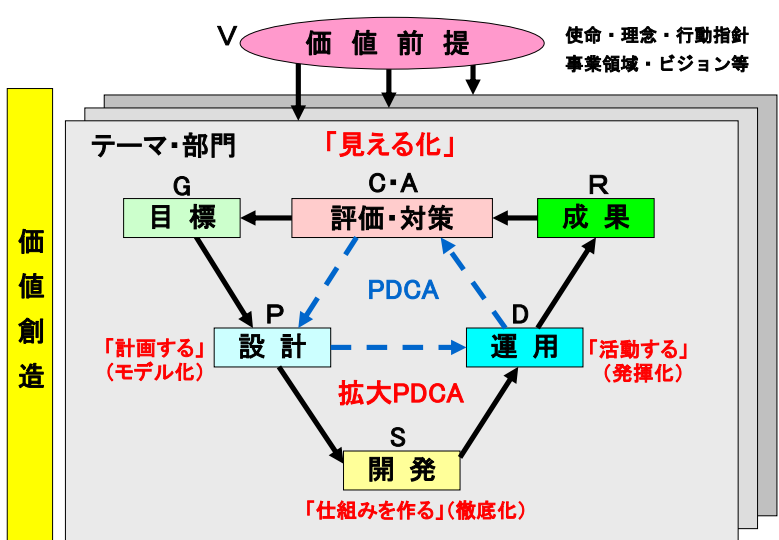
成功を確実に達成するには右の『V字工程法則』に則って着実に作業を進めていくのがよいでしょう。個人の場合は当然のこと、組織の場合はメンバー全員が認識を合わせ、協力して実行する必要があります。

次頁に例を示します

工程	工程の定義	業績向上例	顧客満足向上例	人材育成例
目標	達成したいテーマの内容とレベルを設定する	売上・利益 	顧客満足度 	社員の育成・業績
設計	目標達成のためのありべき姿や手段を計画する(モデル化)	販売戦略・戦術 	顧客対応方法 	キャリア設計
開発	設計に従って実用化を図る(徹底化)	販売体制・ルール構築 	研修・OJT 	人材育成
運用	具体的に活動し設計内容を実現する(発揮化)	販売成果 	満足度成果 	個人の成果
成果	運用によって達成した価値を享受する			
評価・対策	各工程の内容や工程間連結内容を成果で評価し対策を講ずる	緊急対策 	サービスレベルの向上 	追加育成策



V字工程法則

分類	原理・原則	解説・例	*
はじめに	<ul style="list-style-type: none"> 本資料は、経営、事業、業務、人材育成等多岐にわたる企業活動において、成果を確かなものにするために、本質を踏まえて「V字型プロセス」を着実に実行する法則を紹介するものです。 		
法則が必要な背景	物事を成すには手順がある	<ul style="list-style-type: none"> 物事を成すには、それを実現するための手順を踏んで着実に実行する必要がある。 	
	企業も人も自己流で行動している	<ul style="list-style-type: none"> 特にホワイトカラーの世界では、企業も人も自己流で行動して手順が明確でない場合が多い。成功した人でも何故成功したのか分からない場合が多く、他人に技術移転できないばかりか、自分がもう一度成功する保証がないこともありうる。 	
	成功するには踏まえるべきプロセスがある	<ul style="list-style-type: none"> 成功するには踏まえるべきプロセスがあり、関係者全員でこれを「見える化」し、遵守することが必要である。 	
V字工程法則	価値前提を押さえる	<ul style="list-style-type: none"> 企業や組織、さらに社員は、日々「価値創造」を行っている。 ⇒対顧客、対自社、対自分、対社会 その前提条件になる企業や部門の「価値前提」に準拠して一致団結して行動する必要がある。 ⇒使命、理念、行動指針、ビジョン等 	
	実行工程群を着実に踏まえて実行する	<ul style="list-style-type: none"> 価値創造を着実に達成するためには、下記の5つの「実行工程群」を順に実行していく必要がある。 <ul style="list-style-type: none"> 目標工程：達成したいテーマの内容とレベルである 設計工程：目標達成のための内容や手段を定義することである 開発工程：設計に従って実用化を図ることである 運用工程：具体的に活動し設計内容を実現することである 成果工程：運用によって達成した価値を享受することである 	
	制御工程群を随時・定期的に実施する	<ul style="list-style-type: none"> 上記実行工程ごと、さらには関係する工程間の実行状況が適正であるかを評価し、さらなる改良を加えるために、以下の2つの工程で制御する。 <ul style="list-style-type: none"> 評価工程：各工程、工程間連結および成果を総合的に評価・検証することである 対策工程：評価結果を踏まえて具体策を打つことである 	
V字工程の図	目標を確実に達成するには、価値前提を基にテーマを設定し、5つの「実行工程」と、これらを制御する2つの「統制工程」を有機的に機能させる	<div style="text-align: center;"> <h3>V字工程法則</h3>  <p>価値創造</p> </div>	
V字工程法則のメリット	会社・組織が一致団結して考動できる	<ul style="list-style-type: none"> テーマに対応して関係者が実行すべき工程と作業内容が明確になるため、それぞれの役割を果たしながら足並みを揃えながら考動できる。 	
	問題の位置付けが明確になり適切に対応できる	<ul style="list-style-type: none"> 問題が発生しても、どの工程が不備であったか迅速・的確に把握できるため、当該工程でやるべきことが明確になり、適切な対策が講じられる。 	
	企業内のあらゆるテーマに適用できる	<ul style="list-style-type: none"> 一度本技法を修得すれば、企業内のあらゆるテーマに適用できる。 ⇒経営、事業、業務、人材等 次ページに各工程の定義と人材育成の例を示す。 	

V字工程法則（2）

分類	原理・原則	工程の定義	人材育成の例	*
価値前提	価値前提を押える	・企業の価値前提（使命・理念・行動指針・ビジョン等）を押えることである。	・価値前提を調査し、会社は事業展開のためにどのような人材を必要としているかを把握する。	
	テーマ設定	・取り組むべき重点テーマを明らかにすることである。 ⇒経営、事業、業務、人材	・育成の対象者や対象業務や能力向上テーマを設定する。 例) 経営者、管理者、一般社員 例) 営業、技術、管理、共通	
価値創造の 実行工程	目標	・達成すべき以下のような内容を明確に設定したものである。 ⇒売上・利益の増大、顧客満足度の向上、事業の発展、個人の成長	・成長目標を設定する。 例) 早期戦力化、現状能力の向上 新規能力の獲得 ・業績目標を設定する。 例) 売上・利益増大、顧客満足度向上、ヒット商品開発	
	要件	・目標を実現するために解決すべき問題・課題への対応策や条件等である。	・目標を実現するために解決すべき問題・課題への対応策や条件等を関係者からヒアリングする。	
	設計	・要件を満たすために作成することをモデルとして定義することである。 ・定義される内容は作成物や守るべきルール等として表現される。	・要件を満たすべきあるべきモデルを設定し具体的な内容を定義する。 例) キャリアパスと持つべき能力 ・育成体制・環境・方法を標準化する。 ・開発工程以降の作業内容を具体的に構築する。	
	開発	・設計内容を実現するために準備・構築・徹底することである。 ・開発の対象は、人・モノ・ノウハウの経営資源の実用化の仕組み（システム化；system）作りである。	・設計内容を具体化する。 例) 育成体制・環境の構築 例) 育成手段の開発・整備 ・定期的・随時に育成する。 例) 研修、OJT、自己啓発 ・徹底させその状況を確認する。 ・成長状況を確認する。	
	試験	・開発内容が設計内容通りに実現されているか確認することである。	・能力向上状況をテストする。 ・弱点を補強する。	
	運用	・開発内容が要件を実現するために具体的に活動することである。 ・開発されたものでも運用を習慣化し発揮されなければ成果に結びつかない	・成長した能力を実際の業務で発揮させて成果に結び付ける。 ・確実の発揮させるためには、「本人の努力」と「上司の支援」の両輪で取り組む。	
	成果	・活動の結果として得られる価値（付加価値、新規価値）である。 ⇒売上・利益の増大、顧客満足度の向上、事業の発展、個人の成長	・発揮の結果として得られる成長と業績を享受する。 例) 成長：基盤能力、業務能力 例) 業績：売上・利益増大、顧客満足度向上、ヒット商品開発	
統制工程	評価	・5つの実行工程の個々の工程について適切な実行かを評価・検証する。 ・工程間連結が適正に機能し、ビジネス流が確保できているか評価・検証する。	・5つの実行工程群の個々の工程について適切な考動かを評価する。 ・工程間連結が適正に機能し、人材育成システムが実現できているか評価・検証する。	
	対策	・上記の評価・検証に基づき具体的対策を速やかに打つ。	・人材育成の仕組みを改善する。 ・個人毎に最適な育成方法を講ずる。	
	学習	・上記対策上具現化のために必要であれば学習・研究からやり直す。	・人材育成のより効果的な方法論や技法を修得する。	